東京都埋蔵文化財センター報

たまのよこやま

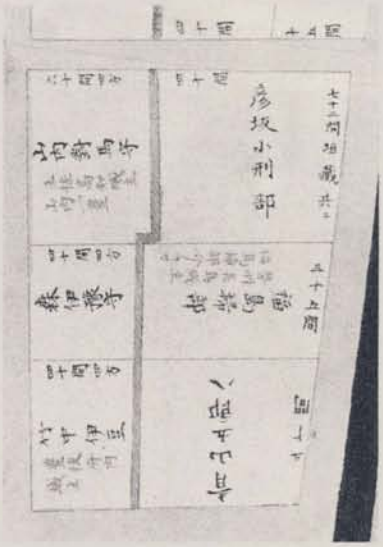
特集「江戸大名屋敷を発掘する。」

64

■ 丸の内三丁目遺跡　千代田区

丸の内三丁目遺跡は、旧都庁の敷地内にあった遺跡で、1992年に国際フォーラム建設に先立って発掘調査を行いました。1590（天正18）年、徳川家康の江戸入府以降、日比谷の入江を初めとする沿岸部は埋め立てや地盤改良が行われていきました。1603（慶長8）年、家康が征夷大将軍となると、江戸は将軍の城下町にふさわしい町造りがなされることとなり、後に大名小路と呼ばれる当地にも旗本や外様大名などの屋敷が造成されていきました。

「慶長江戸之図」を見ると、当地には**土佐国高知城主山内一豊**（24万石）、**幕府代官彦坂小刑部元正、大和国松山城主福島高晴、**（3万石）、**旗本青山五郎八、豊後国府内城主竹中重利**（2万石）、**豊後国佐伯城主森（毛利）高政**（2万石）の屋敷が認められます。おそらくこの6家が、造成された当地を最初に拝領したものと思われます。



慶長江戸之図（慶長13）1608年頃

1657（明暦3）年には、江戸城本丸天守閣をはじめ江戸市中の6割が焼失した「振袖火事」があり、市中の屋敷割りは大きく様変わりしたのですが、当地の屋敷割りには、ほとんど変化がありませんでした。

当地の様相が大きく変わるのは1698（元禄11）年の「勅額（ちょくがく）火事」とよばれる大火の後です。この大火により、当地は改めて土佐山内家と阿波蜂須賀家の2家が拝領することとなりました。この際、大火以前の屋敷割り・区画溝などはすべて埋め戻され、新たに山内、蜂須賀両家の屋敷境に1条の石垣溝が設けられました。その後、当地は、この2家の占地のまま幕末に至ります。すなわち、江戸時代を通じて当地に居住したのは、土佐山内家だけということになります。

勅額火事以前に当地に居住した大名・旗本の中には、初期の幕府政治を支えた寺社奉行や勘定頭なども含まれていました。寺社奉行松平勝隆の屋敷は役宅として使用されていた時期もあり、訴訟ごとで多くの神官や僧侶が出入りしていたと考えられます。また勘定頭伊丹勝長は職務上の誤解により、屋敷内で部下に斬り殺されるという事件も起きています。一方、私貿易のため贋金造りまでした長崎奉行竹中重義に連座した弟重信や、三代将軍家光の死後、所領を返上し出家して江戸市中を托鉢して廻った松平定政なども当地の住人でした。

赤織部茶碗　土岐市美濃陶磁器歴史館1999より

今回は、これらの旗本・大名屋敷の発掘調査で出土した多くの遺物のうち、江戸時代前期の陶器を中心に展示を行います。出土した遺物は、大名屋敷街という特徴から優品が多く、舶載の天目茶碗、朝鮮で焼かれた可能性のある碗や「仁清（にんせい）」銘のある碗、初期織部の製品なども含まれています。

（栗城 譲一）

灰釉茶碗　土岐市美濃陶磁器歴史館1999より

尾張藩上屋敷跡遺跡　新宿区

現在、防衛庁の庁舎群が聳える高台一帯（東京都新宿区市谷本村町）は、かつて**尾張藩市谷邸**の所在した場所です。尾張藩市谷邸は尾張藩の江戸屋敷で、二代藩主**徳川光友**が1656（明暦2）年に拝領したのがその始まりです。尾張藩の上屋敷は当初、江戸城内吹上の鼠穴（ねずみあな）邸が当てられましたが、1658（明暦4）年、鼠穴邸を幕府に返上し、光友とその妻**千代姫**（将軍家光の娘）が市谷邸に移り住むことになったことから、同屋敷が上屋敷として機能を果たすこととなり、以後幕末まで存続しました。

尾張藩市谷邸については、今までに尾張藩上屋敷跡遺跡・市谷本村町遺跡として発掘調査が実施され、同屋敷を研究する重要な資料が得られています。

尾張藩市谷邸に限らず、大名の江戸上屋敷は大名個人の居宅であるとともに、各藩の江戸における出先機関のような役割も果たしていました。屋敷内には役職を持った多くの藩士が勤務しており、まさに今日の会社や役所のような様子であったと考えられます。尾張藩上屋敷跡遺跡からは柳茶碗（やなぎちゃわん）や御小納戸（おこなんど）茶碗とよばれる茶碗が数多く出土していますが、それらは会社や役所でよく見かける共用の茶碗や食器を連想させます。

格式や体面を重んじる当時の武家社会にあっては、屋敷構えをそれ相応に整えることは何事にも優先する重要な課題でした。そのため各藩は、国元の財政を傾けるほどの莫大な経費を掛けて、江戸上屋敷の維持に努めたと言われます。一方、それに伴う労働力や物資の調達は、江戸や地方の産業や流通を促進するなど、今日でいう公共事業としての効果もあったようです。発掘調査の結果からは、御殿を支える礎石や排水溝に使われる間知石（けんちいし）などの石材、あるいは御殿の屋根に葺くための瓦が多量に調達されていたことが判り、その背後には大きな経済効果があったことが窺われます。

このように、大名屋敷の発掘調査は、屋敷内に勤務していた藩士の生活ぶりや屋敷をとりまく経済活動など、古文書のみでは解き明かせない部分にも光をあてることができます。また、それらを現代の社会と対比してみることも大きな意義を有するのではないでしょうか。　（内野 正）

家紋入り鬼瓦

柳茶碗

萩藩毛利家屋敷跡遺跡　港区

萩藩毛利家屋敷跡遺跡は、港区赤坂9丁目にあり、旧防衛庁の敷地内にあった遺跡で、その再開発事業のため2002年から2003年にかけて発掘調査を行いました。遺跡名のとおり、江戸時代には**萩藩毛利家**の**下屋敷**がありました。

萩藩毛利家は現在の山口県に当たる長門、周防両国37万石を治めていた大名で、1636（寛永13）年、それまであった3つの江戸藩邸が手狭になり、愛宕下の屋敷を返還する代わりに当時江戸の外れだったこの地を拝領して下屋敷としました。普通、藩主は上屋敷に住み、藩政の中心は上屋敷にあるのですが、1645（正保2）年に上屋敷作事のため藩主の**毛利秀就**が下屋敷に移って以来、度々藩主が居住するようになって、下屋敷ではあるものの江戸藩邸の中心的役割を果していました。

萩藩といえば、**萩焼**が思い浮かびます。萩焼は「一楽、二萩、三唐津」と言われるように、素朴で柔らかみのある趣から広く尊ばれていた陶器で、江戸時代初期に萩で生産され、日本各地に流通しました。勿論、江戸にも出回り、多いとは言えませんが江戸遺跡でも出土しています。発掘にあたり、萩藩ゆかりのものとして特に注目していたところ、果たして萩焼がまとまって出土していることがわかりました。特に、従来あまり注目されなかった江戸時代前半期の萩焼は、碗を中心に肥前や京焼に類似したものが多く認められることがわかりました。まだ、本来の萩焼なのか、肥前産なのかわからない資料も多いのですが、この発掘がきっかけになって実態解明が進むことが期待されます。

さて、黒船来襲にはじまる幕末の混乱の中で、萩藩と幕府の関係は大変悪化しました。1864（元治元）年7月、幕府はついに萩藩を攻めることを決め、屋敷接収のためさっそく兵を繰り出し下屋敷を取り囲みました。そして、屋敷に残っていた人々を捕らえ、屋敷を取り壊してしまいました。その際、材木や諸道具は回収業者に払い下げられましたが、大量の陶磁器などは回収されることなく屋敷内に捨てられました。大きな土坑から出土した約13万点もの陶磁器がそれを物語っています。萩藩はこの時には戦わずして降伏しましたが、2年後の戦いでは幕府に勝ち、勝利軍として明治時代を迎えることになります。

今回は、萩藩毛利家に関わりのある多くの遺物の中から、萩藩ならではの遺物として、萩焼、現在の山口県下関市で作られた赤間硯（あかますずり）、毛利家の家紋の入った瓦を展示しました。また、幕末の取り壊しの際に一括して捨てられた遺物から、肥前産の磁器の皿を選びました。（伊藤 健）

萩焼の茶碗

地鎮祭に伴う遺構

宇和島藩伊達家屋敷跡遺跡　港区

宇和島藩伊達家屋敷跡遺跡は、港区六本木７丁目の旧東京大学生産技術研究所・物性研究所の跡地に存在しており、（仮称）ナショナルギャラリーおよび政策研究大学院大学の建設に先立ち、2001～2003年にかけて発掘調査が行なわれました。

宇和島藩伊達家は1655（明暦元）年にこの地に居を構え、以来幕末までの約200年間、江戸屋敷として使用していました。初めは中屋敷として購入しましたが徐々に敷地を拡大し、1681（天和元）年には屋敷替えによって上屋敷と改められました。幕末近い1852（嘉永5）年に作成された屋敷絵図によると、その頃の敷地は約32000坪（10万㎡）と広大なものとなっていたようです。

発掘されたのはその内の8000㎡ほどですが、多くの遺構が確認され、陶磁器を中心とした遺物も大量に出土しています。主な遺構としては、礎石建物や掘立柱建物、石組遺構や上水施設、井戸、さらに切石組のカマドや地下室など、屋敷を構成していたさまざまな要素を確認することができ、屋敷絵図との対照から御殿エリア・長屋エリア・表御門エリアの各施設に相当することが分かりました。

その中でも特筆すべきものに、巨大な２基の土坑が挙げられます。これらは屋敷内の造成を目的とした土取りによって生じたと推定され、検出状況などから記録（御勤方日記 安政六年）に記されている幕末期の1859（安政6）年に発生した大火災の後の、復旧工事に伴うものと考えられます。その埋土中からは５万点を超す遺物が焼土や焼けた瓦とともに出土しており、これらはこの火災の際にゴミとして大量に廃棄されたものと推定されます。

遺物のほとんどは日常生活で使用される雑器類でしたが、その中には優品とされる鍋島藩窯の製品も多く含まれていました。宇和島藩伊達家は、佐賀藩鍋島家と深い姻戚関係にあったことから、これも両家の関係を表すものとして注目されるものです。　（西山 博章）

肥前産磁器大皿

鍋島藩窯製品

向柳原町遺跡　台東区

向柳原町遺跡は、台東区浅草橋５丁目の旧都立忍岡高校に所在する遺跡で、台東地区単位制高等学校の建設に伴い、2003～2004年に発掘調査を行いました。

江戸時代、浅草向柳原の地には、**平戸藩**（6万1,700石）〔現在の長崎県地方〕が屋敷を構えており、遺跡は屋敷の庭園部分に相当します。庭園の池は、隅田川へ通じる三味線堀から水を引き入れた「潮入りの庭」で、園池を中心とした「回遊式庭園」に分類されます。庭園の起源は、1641（寛永18）年に藩主**松浦隆信**が**小堀遠州**と大徳寺の僧**江月**と謀り、当時の浅草鳥越邸に作庭した「**向東庵**（こうとうあん）」が起源とされています。

1642年に神田にあった上屋敷が火災により焼失した後、鳥越邸が上屋敷となり庭園も整備されました。1834（天保5）年には庭園の名前を「**蓬莱園**（ほうらいえん）」とし、六義園・後楽園などと並んで江戸の名園とうたわれ、明治時代以降も度々園遊会などが催されました。しかし1923（大正12）年の関東大震災で大きな被害を受け、土地は東京市に売却され、

初期庭園の護岸石組と洲浜

僅かに残された池の一部とその傍らの大銀杏などの樹木や石灯籠・石碑などに庭園の威容が偲ばれるにすぎませんでした。

発掘によって園池の北と南側の一部を明らかにすることができましたが、庭園は大きくみて２時期に変遷しています。初期庭園期（1641～1689年頃）では、北側に流れや小形の池などがあり、さらに赤・緑色の砂や白色粘土・玉砂利などを用いて庭の色彩に変化を付けていました。南側の池の平面形は、直線と曲線を組み合わせ、さらに護岸は石組と杭列を巧みに組み合わせ、洲浜を加え、浮石と岩島の配置を工夫するなど景観に変化を与えています。

蓬莱園期（1689～1923年）には、園池南西部を拡張し、山鹿素行（やまがそこう）の影響により南側の護岸を石垣状護岸へ大改修している様子がうかがえ、北側では遺存状態良好な流れや、庭園附属建物跡などが検出されました。

庭園から出土した遺物には、特に初期庭園期のものに中国産磁器・肥前系磁器の優品が多量に含まれており注目されます。肥前系磁器は、染付（鍋島様式の変形皿を含む）・青磁・白磁など多器種に及び、香炉・花入・向付けには特注品を多く含んでいることも特徴です。これらは屋敷の中枢で使用されたものと考えられます。また大量に出土した木製品の中には、文字資料も多く含まれ、荷札からは平戸から浅草に送られてきた国元の特産品もみられ、特産品を賞味する屋敷内の藩士の生活も垣間みることができます。また木製の出勤簿は、屋敷内の台所での女性の勤務実態を復元する上でも重要な資料となっています。

（飯塚 武司）

表紙：尾張藩上屋敷跡遺跡の瓦溜土坑　　写真提供：東京都教育委員会（P2を除く）

発行　平成17年7月1日　（財）東京都生涯学習文化財団　東京都埋蔵文化財センター
〒206-0033 多摩市落合1-14-2　TEL 042-373-5296　http://www.tef.or.jp/maibun/

R100 古紙配合率100%再生紙を使用しています。